

『瀬戸内の山～里～海～人が つなぐる環境教育』 —愛媛大学の取り組み—*

愛媛大学 寺下太郎

2007年12月22日

1 GP名称の意味するもの

愛媛大学の立地条件をフルに活用。加えて、総合大学という特性をいかし、スタッフ・参加者ともに、様々な領域から参加。

- 「山」：附属演習林
- 「里」：附属農場およびキャンパスのある松山市
- 「海」：沿岸センターおよび弓削商船高等専門学校の練習船
- 「人」：自然教育や環境教育に留まらず、社会的・経済的な側面を意識

2 育成する人材像

資格認定であり、全学生を対象とするものではない。

- 自然環境、地域社会(文化)と経済の3つの視点に立ち(ESDの基本的な視点)、
- 自ら地域に出向き、地域から地球規模の環境の諸問題について自ら気づき(課題発見能力)、
- グローカル精神に基づき、その問題についてさまざまな方向から考察してその解決に取り組むことのできる知識と技能を持ち(問題解決能力)、
- さらには地域のさまざまな意志決定レベルを通して問題の解決に向けて積極的に働きかけることのできる(社会参画意識)人物

*問合せ先: 愛媛大学農学部現代GP環境ESD事務局〒790-8566 愛媛県松山市樽味3-5-7
email: esd-s1@agr.ehime-u.ac.jp

3 カリキュラム

共通教育の枠組み。知識と体験のインプット グループに分かれての企画に対して外部評価 実際にイベントを企画し実行、という流れ。

- 一年前期: ESD 基礎「持続的発展可能な社会のための学び」
若干の講義と様々なワークショップ。参加型授業。
- 一年後期: 環境 ESD 指導者養成講座 I
地域の人々に向けてのイベント企画を目標としてのフィールドワーク。
- 二年前期: 環境 ESD 指導者養成講座 II
Iでの成果をひとつの企画に集約、実施

4 認定資格の種類

- II 種資格認定のためには、以上に加えて、ESD の 3 領域に関連する授業 (認定授業) の単位を取得し、申請する。
「愛媛大学環境 ESD 指導者 II 種資格」
- I 種資格認定のためには、II 種を取得後、それぞれの学部での専門科目を修め、外部でのインターンシップで実体験を積む。以上の要件をそろえた後、認定審査をうける。
「愛媛大学環境 ESD 指導者 I 種資格」

5 参加者

構成は、ほとんどが 1, 2 年生、これに加えて、大学院生と社会人 (科目等履修生として登録)。できるだけ様々な人々の参加を促すため、土日に開講。

人数は、 節目ごとに半減。

- 講義「ESD 基礎」登録者 100 名以上
- 同単位取得者 66 名
- II 種資格取得者 33 名
- I 種資格に向けてのインターンシップ等を登録している者 12 名

6 途中経過をふりかえって

- 『指導者』とは何か。
リーダー？コーディネーター？ファシリテーター？アクティビスト？
当事者意識を持って社会に積極的に参画する人物、とは？
- 『ESD』をどう解釈するか。
 - － Sustainable: これはひとまず「持続可能」とする。ただし、いわゆる「堅持」ではなく、ダイナミズムを伴う。
 - － Development: 既存のものを拡大するだけの「開発」や「発展」ではなく、世の中を変えていく「社会づくり」であるべき。
 - － Education: 教員が学生に、あるいは大学が地域に、といった一方通行型のいわゆる「教育」「啓蒙」だけでは現状を変革できないだろう。それよりも、双方向型の「まなびあい」の枠組みが必要。

「持続可能な社会作りのための学び」という表現を提言
...とはいうものの、その枠組みを実際に提供するためには？
- 受講生の大半を占める『学生』
 - － 好奇心も熱意もあり、学習意欲は高く、そしてカリキュラムへの期待が大きい。
 - － 外部社会に自分が影響を与えるのだという発想を、持たない。
 - － 自然体験、社会経験に乏しく、自己認識・自然観が確立されていない。

初めて経験する、自分で考え行動することを求められる授業形式への、とまどいや反発。前項に掲げた「まなびあい」の理念をわかってもらうには？
- その他、
 - － カリキュラムを実際に動かす際に生じる諸問題
 - － ネットワークづくりや副専攻化などを視野に入れた今後の方向についての議論